

岡山県立美術館では、院展（日本美術院）で活躍し、武蔵野美術大学教授としても日本画壇に重きをなした塩出英雄（1912－2001）の生誕100年を記念する展覧会を開催いたします。

塩出は福山市に生まれ、帝国美術学校（現武蔵野美術大学）にて山口蓬春、小茂田青樹らに日本画を学び、23歳より奥村土牛に師事します。25歳で院展に初入選して以来、同展を舞台に活躍しました。彼は学生時代に、日本画のみならず東洋美術史や美学、仏教学も本格的に学びました。仏教や茶道、短歌や能にも親しむなど芸術文化の素養に溢れています。



秋草 1931年



白鳩 1931年頃

これまで1999年練馬区立美術館・ふくやま美術館で「塩出英雄展」、2004年井原市立田中美術館で「没後3年 塩出英雄遺作展」等、塩出の画業を顕彰する大きな展覧会が開催されました。ところが昨年新たに福山市の遺族宅で青年期の作品がまとまって発見され、それまで最初の作品とされていた帝国美術学校卒業制作《茶庭》（1936 ふくやま美術館蔵）以前に、既に多彩な画風を展開していたことが明らかになりました。ふくやま美術館では既に今年9月12日－12月9日、「秋季所蔵品展 生誕100年 塩出英雄展」が開催され、同館に寄贈された青年期の作品24点を初公開、新たな一面が紹介されています。

このたびの特別展「生誕100年 塩出英雄展」は、塩出作品をまとめて紹介する当館初めての展覧会で、関東および中国地方の美術館や寺院に所蔵される代表的な院展作品を中心に、前述の新しく発見された青年期の作品など本画70点余りと、その他スケッチや書、遺品等も展示し、80年におよぶ塩出の画業を振り返ります。

本展を記念して当館に新しく寄贈いただいた4点のうち、《秋草》（1931）についてご紹介いたします。本図は狗尾草、蓼、嫁菜、薊など、何気ない秋の草花を装飾的に描いており、帝美入学後まもない塩出が、山口蓬春らから伝統的な大和絵の表現を学びつつ自己の画風を開拓していく時期の初々しい作品です。若い頃から好んで描いた鳩を題材にした《白鳩》（1931）も清明な雰囲気、緑青の美しさが際立ちます。

新たに紹介される部分も含め、「茶道画」シリーズや「仏教」をテーマとした作品群、大自然に真正面から挑んだ風景画の連作など、塩出が追求した清澄で深淵な自然美の世界をじっくりご鑑賞ください。

【主任学芸員 中村麻里子】



塩出英雄《秋岳》

アントワープ王立美術館所蔵

ジェームズ・アンソール 一写実と幻想の系譜－

JAMES ENSOR

James Ensor in Context. Ensor and the History of European Art from the Collection of the Royal Museum of Fine Arts Antwerp

2013年2月8日(金)
－3月17日(日)

ベルギー近代絵画の巨匠ジェームズ・アンソール（1860－1949）は、仮面や骸骨、不気味な人形といった奇怪なモチーフや、生まれ故郷オステンドのカーニバルの情景を鮮烈な色彩で描いた画家として広く知られています。

ブリュッセルの美術アカデミーで1877年から3年間学んだアンソールは、初期には風景や海景、室内の人物や静物といった伝統的な主題を写實的に描いていましたが、1880年代になると徐々にグロテスクなモチーフを画面の中に登場させるようになり、表現主義的で幻想的な独自の芸術世界を創り上げました。きわめて独創的であったアンソールは、同時に、幻想とユーモアあふれる初期フランドル派のボッシュやブリューゲル、あるいはフランドル・バロックの巨匠ルーベンスや光の画家レンブラントといった過去の巨匠たちを学び、さらにはクールベやフランス印象主義、あるいはターナーといった19世紀の画家たちからも影響を受けていました。辛辣な皮肉や諧謔にあふれるアンソールの作品は、あまりにも奇抜で斬新であったため、発表当時にはあまり理解されず酷評にさらされましたが、後に表現主義やシュルレアリスムなど20世紀美術の先駆けとして高く評価されるようになりました。

この展覧会では、アンソール研究の中心地であるアントワープ王立美術館が誇る傑作《陰謀》をはじめとするアンソール作品を中心に、彼が様々な形で影響を受けた、ブリューゲル（子）やルーベンスといったフランドルの画家や同時代の画家の作品をあわせて展観します。奇オアンソールの芸術世界を、それが生まれた背景にある豊かなヨーロッパ絵画史の伝統とともに堪能していただけたらと思います。

【学芸員 橋村直樹】



ジェームズ・アンソール《陰謀》1890年 油彩／キャンヴァス



ジェームズ・アンソール《絵を描く骸骨》1896年頃 油彩／板
Lukas – Art in Flanders vzw / KMSKA

平成24年度 展覧会スケジュール(1月－4月)

特 別 展	生誕100年 塩出英雄展	12月21日(金)－2013年 1月27日(日)
	アントワープ王立美術館所蔵 ジェームズ・アンソールー写実と幻想の系譜－	2013年 2月 8日(金)－ 3月17日(日)
岡山の美術展	残響 岡野耕三 回顧展	12月14日(金)－2013年 1月27日(日)
	伊勢崎満 回顧展	12月14日(金)－2013年 1月27日(日)
	おかやまアート・コレクション探訪Ⅴ	
	野崎家コレクションー個性集う地方サロンー	2013年 3月 5日(火)－ 4月 7日(日)

編 集 後 記

美術館ニュース99号をお届けします。今号では展覧会の内容が盛り沢山になっています。美術館へは特別展を観るために来られる方が大半だと思いますが、特別展のチケットで岡山の美術展も観覧することができます。特別展で普段岡山ではなかなか観ることのできない作品に触れたあとは、岡山の美術展の会場にも足を運び、岡山の美術や作家についてより深く味わっていただけたら幸いです。

【o.m.】

美術館ニュース 第99号

発行：2012年12月
発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
Email：kenbi@pref.okayama.lg.jp

寒中随想

県立美術館の北側、天神山の麓に「土光敏夫先生記念苑」がある。美術館が管理していて手入れがゆき届き、静寂の気が漂う。僕にはお気に入りの山麓の小天地である。

土光敏夫（明治29年－昭和63年）は、石川島播磨重工で造船王国・日本を創りあげ、「行革」を断行・実現した経済人で、質素な生活は“メザシの土光さん”と呼ばれていたことをよく覚えている。土光さんが岡山出身だと知られていても、記念苑は未知だろう。

顕彰碑には淀井敏夫の〈希望・風と鳥と少年たち〉と題された彫刻が碑上に建っている。少年たちは鳥とともに天上に向かい爪先立つ。淀井彫刻に特有のジャコメッティを東洋的にした風が吹き抜ける爽やかなブロンズで、いつ見ても気持ちがいい。石碑には土光の顔と略歴のプレート、それに土光の書字で「日新 日日新」がブロンズになり嵌め込まれている。『大学』にある「日日新又日新」は、日を逐うて絶えず進歩すること、を意味する。明治中期生まれの少年が四書五経を素養とする、背筋が一本通った姿勢をみる思いがある。

土光の中学の同窓生に、土光が“変わり種”と呼ぶ東善作（明治26年－昭和42年）がいる。あのリンダーグの大西洋横断飛行の3年後の1930年に、アメリカからヨーロッパ経由で日本まで単独飛行を敢行した勇敢なパイロットで、東京立川飛行場に着陸予定を、岡山上空から眼下に関西中学の校庭が見えたとき、思わず三たび旋回して岡山練兵場に着陸したという猛者であった。東の戦後は、「ウラン爺さん」で再び注目された。原子力が平和利用を叫ばれた草創期に、ガイガー・カウンターを持つ「山師」となり、人形峠でウラン鉱を発見し、日本の原子力開発の原点となった。現在その場所は、人形峠環境技術センターとなり県の管理下にあると聞いている。

未だ背筋が寒くなる東日本大震災でのフクシマ原発事故は、広島原爆と同じ核nuclearの分裂にある。無限のエネルギーを獲えたと驕る人間に希望はない。畏怖する人間に未知の希望はある。

【館長 鍵岡正謹】

岡山県立美術館 学校と美術館の連携活性化事業グッド・スタート・ミュージアム事業(GSM事業)で起こったこと

「ねえ、ねえ、あれ（監視員の椅子）もアートじゃないの。みてみようよ。」

『これ（章タイトル）も意味があるかも。みてみようよ。』これは、「特別展 自由になれるとき—現代美術はこんなにおもしろい!」を、GSM事業で来館した小学生たちと一緒にみていたときに“起こったこと”である。

彼女彼女たちは、視覚に入ってくるものを「意識して“みる”」ことができるようになったが故に、容易に前に進むことができなくなった。目に入ってくるもの全てに「何か意味があるかもしれない」「あれは何であそこにあるのか」等々、みるもの全てに「?（疑問）」がわき起こり、その「?（疑問）」を呼び起こした対象物を“みる”ことで「!（自分たちなりの納得）」を得ようと主体的に行動（鑑賞）し始めたのである。

ここで“起こったこと”こそ「美術的なものの“み方（考え方）”」ではないだろうか。

当館では、以前より学校団体を受け入れるプログラムを実施しており、多くの学校に活用していただいている。平成23年度から2年計画で実施したGSM事業では、今まで実施していたプログラムのより一層の充実（内容や時間の見直し、スタッフの研修等）と、学校が美術館を学習の場とするときの課題の解消（交通手段→県がバスを一日借り上げる&経費→県が半額負担）を試みた。

GSM事業で実施したプログラムは、「岡山の美術展（常設展）」「特別展 自由になれるとき—現代美術はこんなにおもしろい!」「特別展 第59回日本伝統工芸展岡山展」のいずれかを、「アート・ゲーム（○×クイズもしくは読み札カルタ）」＋「対話を通した鑑賞（ヴィジュアル・シンキング）2作品」＋「自由鑑賞」（プログラム所要時間90～120分）で“みる体験”をするというものである。冒頭にあげた場面は、このプログラムを体験している中での児童の発言である。鑑賞者に「美術的なものの“み方（考え方）”」が生まれた瞬間に立ち会えた感動は、教育普及担当者冥利につきる。

残念ながら、GSM事業はこれで終わりとなるが、“美術館で起こる学び”について常に考え、「美術的なものの“み方（考え方）”」が生まれる場を今後も提供し続けていかなければならない。

【主任学芸員（教育普及担当）岡本裕子】

塩出英雄 1967年

画面いっぱいには堂々と描かれた戸隠山。鮮やかに紅葉した木々が山全体を覆い、黄金色に輝いている。恩師奥村土牛の米寿の祝意を込めて描いた作品というだけあって、晴れ晴れとした明るい画面になっている。

塩出英雄（一九二二—二〇〇一）は、福山市に生まれ、帝国美術学校（現武蔵野美術大学）で日本画を学んだ。院展を舞台に作品を発表するが、仏教者として、茶道家として、また歌人としても道を究めた人であり、能や謡曲にも深く親しんだ。



塩出は、「私は仏画を描くようなつもりで山水を描いている」と語った。一見素朴に見える画風は、深い芸術文化への素養に裏づけられ、精神性の高いものとなっている。塩出は、現地での風景写生をし、短歌も詠む。二度歌に詠むとその時の感情が歳を経て何時までも忘れないものである」と言う。

〈戸隠の山は紅葉のますそしてけわしき峰の巖々と連なる〉有川文夫著 如々庵随聞記より

【主任学芸員 中村麻里子】

特別展

自由になれるとき
現代美術はこんなにおもしろい!

現代美術がもっとおもしろくなる10のイベント

現代美術入門編という位置づけで企画された本展が、一ヶ月間の会期をあっという間に終えた。展覧会というのは準備をする期間が圧倒的に長く（20年の歳月をかけた展覧会を知っている）、実際の会期は相対的にとても短く感じられるものだが、いつもにも増して今回の展覧会が早く過ぎ去ったと感じられたのは、関連事業が多く開催されたからに他ならないだろう。

「現代美術がもっとおもしろくなる10のイベント」と銘打って企画されたこれらの企画は、作品鑑賞だけでは味わえない現代美術の魅力を関係者自らが伝えること、そのために現代美術に携わっているさまざまな方面の人々に登場して頂くこと、そして一般的な話ではなくそれぞれが特化した話をして頂き、その総体として、



中原浩大 クレヨンと鉛筆によるライブ・ドローイング

いわば「何でもあり」な現代美術が浮かび上がってくること、を大まかな目的としていた。基本的にはやはり作家がその中心となったが、その中でもまさに同時期に他館で個展を開催している作家の貴重なお話や、またないパフォーマンス／公開制作の機会、それ以外にも美術館で現代美術に関わっている方、地域に根差しながら著名な作家と関わっている方、出版の分野で関わっている方などの貴重なお話など、多くの方々にそれぞれにとっての現代美術の魅力を存分に話して頂く機会を設けられたのではないだろうか。

私も自身の担当したギャラリートークに際し20世紀以降の作品を100点選んだのだが、時代が進むにつれその「今」を代表するような一点がなかなか選びづかったことがとても印象的に残っている。これは音楽など他の分野でも同じで、ミリオンセラーは出ないが、個々人が本当に好きな表現をインディーズで探し当てることが（以前に比べ）容易になっているのだろう。我々は多様性が飽和した時代に生きており、今後の美術展もそのようなものが望まれる時代に生きているのではないか、そんな思いを抱いた一ヶ月半の会期だった。

【学芸員 高嶋雄一郎】

おかやまアート・コレクション探訪Ⅴ

野崎家コレクション —個性集う地方サロン—

2013年3月5日[火]－4月7日[日]

岡山県内の多彩なコレクションに注目する「おかやまアート・コレクション探訪」では、昨年に引き続き倉敷市児島の「野崎家コレクション」をご紹介します。

二回目の企画となる本展では、「日本の塩田王」と称された野崎家が、個性豊かな文化人の集うサロンとなり、幅広い交流の中で収蔵していった作品をご覧いただきます。江戸後期、茶や和歌を嗜んだ風流人である初代・野崎武左衛門（1789－



《染付松竹梅文窓絵水指》永楽保全

1864）ゆかりの茶道具、貴族院議員として活躍した武左衛門の孫・野崎武吉郎（1848－1925）に贈られた還暦祝いの品々からは、野崎家当主の文芸への理解と人脈の広さがうかがえます。また、武吉郎の娘・於達と大阪の女性文人画家・橋本青江との交友を示す書画や、近代のアジア主義思想を背景とする中国趣味の書画・煎茶道具など、大切に守り伝えられた品々を通して、時代の息吹や人々の交流の様子を感じていただければ幸いです。

【学芸員 古川文子】

岡山の
美術展

OKAYAMA'S ART
EXHIBITION

残響 岡野耕三 回顧展

2012年12月14日[金]－2013年1月27日[日]



《共鳴して鳴り出すふたつの弦》1971年 当館蔵

岡野耕三（1940－2003）はスペインで「クエンカの日本人画家」として名を馳せた抽象画家です。岡山県児島郡味野町（現在の倉敷市児島味野）に生まれ、東京藝術大学油絵科に入学。寺田春式、小磯良平に師事したのち、1967年同大学院2年の春にスペインに渡りました。マドリード、トレドで創作活動を行ったのち、1969年にクエンカに移住。以後、独自の色彩感覚と空白を

白をいかした作品を描き続けました。

作品は向こうから生まれてくるものだという岡野の制作姿勢は、本能的に色彩をとらえ、自然とわき上がるものに素直に応えるような構成が作品に表れています。自身の作品について岡野は、「凝縮したものが周りの画面に、空白の部分に働きかけて響きあって作品が成立する」と語っています。

雑音から離れ、自分と向き合えるクエンカで美の本質や必然性を探求し続けた岡野耕三。本展では児島やスペインに残された作品を中心に展示し、その活動の軌跡を振り返ります。

【学芸員 大山真季】

岡山の美術—工芸余話

2012年も暮れ、振り返ると今年もたくさん作品と出会った。展覧会として紹介できた野崎家コレクション、新収蔵の小野為郎と岡山の木工芸、備前焼や縞など時代もジャンルも幅広い。野崎家に遺る明治期に岡山で焼かれた旭焼や薩摩焼、香蘭社の作品を紹介したことで、巡り巡って同時代の宮川香山研究と関係が出てきた。木工展では当時の文人趣味から中国文芸を受容する教養の高さに驚き、井上仰山という彫刻家にも興味をもった。開催中の伊勢崎満展は備前焼だが、仰山の作品を伊勢崎満の父陽山がリメイクしていることを知ると、細工物から彫塑へ移り変わる中に相通じるものも感じる。縞展では、縞帖の小さな裂の色あせぬ美しさや世界に共通する機や織りというものを見直す機会となった。展覧会をすれば次々に課題が見つかって興味が尽きない。なかなか研究を深めるところまでいかないのだが、作品の向こうに広がる文化の奥深さや時代性、創作の妙に想像力を膨らませてもらえたら嬉しい。来年も作品を通してそんなわくわく感が伝えられるよう調査や準備にあたっている。

【主任学芸員 福富幸】

伊勢崎満 回顧展
(会期:2012年12月14日－2013年1月27日)

